

使徒言行録 第12章1～19節

パウロがまだサウロと呼ばれていたころ、サウロはイエスを信じるクリスチャンを迫害し、捕まえては牢屋に入れていました。イエスを信じる人たちを迫害していたのはサウロだけではなく、ユダヤ教の指導者たちがみんなやっていたことでした。キリスト教は、同じ神様を信じていたユダヤ教の人たちから迫害されていたのです。

ユダヤ人の王様であったヘロデ王は、エルサレムにいたクリスチャンたちを迫害し、殺害していました。このヘロデ王は、イエス様がお生まれになった時に小さい子どもたちを虐殺したあのヘロデ大王ではなく、その孫にあたるヘロデ・アグリッパ1世という王様でした。このヘロデ王は、クリスチャンを迫害するとユダヤ人たちが喜ぶのでクリスチャンたちを迫害し、そしてエルサレム教会で中心となって働いていたペトロを捕まえて牢屋に入れてしまいました。その話を聞いたエルサレム教会の人たちはみんなで集まって、ペトロが無事に帰ってくるようにみんなで一生懸命祈りました。そしてその祈りが神様に聞かれたのです。牢屋に入れられて鎖で縛られていたペトロのところに天使が現われて、寝ていたペトロを起こしました。すると手を縛っていた鎖が外れ、ペトロは天使のいうとおりに帯を締め履物を履き、天使の後をついていきました。けれどもペトロは、それが本当に起こっていることだとは信じられず、夢を見ているのだと思いました。ペトロが天使の後を付いていくと、牢屋の建物の門がすべてひとりでのけり、外に出ることができました。そこでペトロはそれが夢ではないことがわかりました。ペトロは、我に返って語ります。「今、初めて本当のことがわかった。主が天使を遣わして、ペロでの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださったのだ」。

それからペトロが教会の人の家に行くと、そこにはたくさんの人たちが集まってペトロが無事に帰ってくることを、一生懸命祈っていました。その様子を知ったペトロは、教会のみんなが一生懸命にお祈りしてくれたので、主なる神様がそのお祈りを聞いてくださり天使を送ってくださったことがわかったのです。

みなさんはこの話をどう思われるでしょうか。嘘っぽい作り話のような話だと思われるでしょうか。祈れば、本当にそんな奇跡的な出来事が起こるのでしょうか。

残念ながら、祈れば必ず奇跡的なことが起こるわけではありません。祈りは私たちの力を引き出すものではなく、主なる神様に対する願いだからです。働かれるのは主なる神様であって、私たちではありません。ですから、神様の御心に叶う形の祈りでなければ、決して聞かれることはありません。

祈りは、私たちが神様を使うための道具ではありません。祈れば必ず神様が働いてくださって私たちの願い事が必ず成し遂げられるのであれば、祈りは、神様を私たちの思い通りに動かすための手段となってしまいます。それでは、神様は私たちの思い通りに動く僕ということになってしまうのです。

祈れば、必ず私たちの思い通りに聞かれるということは決してありません。では、今日の聖書の箇所から私たちはいったい何を聞けばよいのでしょうか。

祈れば、必ず奇跡的な出来事が起こるわけではありません。けれども、今日の聖書の箇所において、捕まっていたペトロのところに主の天使が遣わされてペトロが助けられたの

は、教会のみんなの祈りによるのです。祈りは、必ずそのとおりに成るとは限りません。けれども、みんなの祈りがなければペトロの上には奇跡は起こらなかったのです。ペトロが奇跡的に助けられたのは、教会のみんなの祈りがあったからなのです。

祈れば、必ず奇跡が起こるわけではない。けれども、奇跡が起こるところには、必ずその背後に熱心な祈りがあるということを忘れてはならないのです。祈れば、必ず奇跡が起こるわけではない。けれども、祈らなければ決して奇跡は起こらないのです。

祈りとは、自分の力で叶えることではなく、むしろ、自分の力を放棄して神様に依り頼むことなのです。そこで行われることは、十字架にかけられ死んでいかれたイエス様と似ています。祈りは、自分の力の限界を感じ、自分の力を手放して神に依り頼む者だけがなせる業なのです。御自身を十字架上に差し出されたイエス様の思いをいただくときに初めて、私たちは祈ることができるようになるのです。

十字架上のイエス・キリスト。以前、一粒の麦に、「キング・オブ・キングス」という映画の試写会の話を載せたことがあります。日本では残念ながら、ほとんど話題にならず、この教会でも見られた方もほとんどいなかったのではないのでしょうか。この話の原作者は、「クリスマス・キャロル」という有名な話を書いたチャールズ・ディケンズという人です。映画は、チャールズ・ディケンズがその「クリスマス・キャロル」の物語を劇場で朗読劇として披露する場面から始まりますが、5歳の末息子ウォルターのいたずらで、舞台を台無しにされてしまいます。父親のチャールズ・ディケンズは自宅に戻り、いたずらをした末息子のウォルターを叱ろうとしますが、妻のキャサリンのアドバイスを受け、自分の子どもたちのために書き下ろした「キング・オブ・キングス」という物語をウォルターに読み聞かせることにしました。ウォルターは、剣でドラゴンを倒したイギリスの偉大なアーサー王にあこがれていて、アーサー王のような勇敢で力強い人、王の中の王様になりたいと思っていました。けれども、父親であるチャールズ・ディケンズは、本当のキング・オブ・キングス、王の中の王とは、力を振るって人々の上に立つ者ではなく、むしろ自分を差し出して人々を救うイエス・キリストのような人なのだと、教えようとしたのです。

父親のチャールズ・ディケンズは、息子のウォルターにキング・オブ・キングスの話を読み聞かせ始めます。イエス・キリストは、二千年前にベツレヘムで生まれました。12歳で“神の子”としての使命を自覚し、30歳でバプテスマを受け、弟子たちの前で多くの奇跡を起こし、人々に愛と赦しを説き続けました。イエス・キリストへの信仰が広がる一方で、「神への冒涇だ」と敵意を募らせる者たちも大勢いました。やがて、最後の晩餐で自らの死と復活を預言したイエス・キリストは、十字架への道を歩んでいくのです。

キング・オブ・キングスの物語に次第に引きつけられていったウォルターでしたが、イエス様が十字架への道を歩んでいく場面に出会ったとき、ウォルター自身が水の中に沈んでいく場面が出てきます。沈んでいくウォルターを、イエス様が手を差し伸べて引き上げようとしています。すると、ここで誰もが想像もしなかったことが起こります。ウォルターを引き上げた代わりに、イエス様が水の中に沈んでいくのです。この場面は。イエス・キリストの十字架の意味をととても深く教えてくれます。イエス・キリストは、水の中に沈んでいくウォルターや私たちを引き上げてくださるだけではなく、ウォルターや私たちの代わりとして御自身が水の中に沈んでいかれるのです。これが、十字架の意味なのです。

さて、今日の聖書の箇所に戻りますと、ペトロのために一生懸命祈っていた教会の仲間たちの大切なポイントがいくつか出てきます。

一つ目は、ペトロ自身は奇跡的に助けられることを期待していませんでしたし、教会のみんなから熱心に祈られていることも知りませんでした。祈りは、隠れたところでなされるものです。もちろん、「あなたのために祈っています」という言葉が相手を励まし勇気づけることができます。祈られていることを知ることはとても大きな力になります。けれども、祈りは基本的に隠れたところでなされるものです。マタイによる福音書の山上の説教の中でも、6章5節以下にこのように語られています。「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる」。ヘロデ王に捕らえられたペトロは、自分のために教会で熱心な祈りが献げられていることを知らずに、天使によって奇跡的に助けられるのです。

二つ目は、みんなが一つ所に集まって熱心に祈っていたということです。それぞれが自分のところで祈る祈りも大切ですが、今日の聖書の箇所のように教会への迫害が起こり教会が危機的な状況になったとき、みんなで集まって熱心に祈る祈りこそが大切なのです。教会にはみんなで集まって祈る祈祷会が行われています。一人で祈ることと、みんなで祈ること。この両方の祈りが、教会の働きにおいてはとても大切なのです。

三つ目は、みんなが集まって熱心な祈りが献げられていたにもかかわらず、祈っていた彼らは、ペトロが奇跡的に助かるということを期待していなかったということです。もちろん、祈っていた教会の人たちは、ペトロが助かることを願ってはいたのですが、それが奇跡的な形で起こるとは誰も考えていなかったことが12節以下のやり取りをみると分かります。そこには、このように記されています。新約聖書の237ページです。

【こう分かったとペトロは、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った。そこには、大勢の人が集まって祈っていた。門の戸をたたくと、ロデという女中が取り次ぎに出て来た。ペトロの声だと分かった、喜びのあまり門を開けもしないで家に駆け込み、ペトロが門の前に立っていると告げた。人々は、「あなたは気が変になっているのだ」と言ったが、ロデは、本当だと言い張った。彼らは、「それはペトロを守る天使だろう」と言い出した。しかし、ペトロは戸をたたき続けた。彼らが開けてみると、そこにペトロがいたので非常に驚いた。ペトロは手で制して彼らを静かにさせ、主が牢から連れ出してくださった次第を説明し、「このことをヤコブと兄弟たちに伝えなさい」と言った。そして、そこを出てほかの所へ行った。】 祈りは、自分たちの願い通りになることを期待して献げるのではなく、主なる神様にすべてを委ねるときに、そこで起こされる結果は神様からの奇跡の出来事として現れてくるのです。

使徒言行録12章の冒頭では、キリスト教会への迫害がいつそう強められていったことが記されています。迫害が起こり、人の手によってなすすべを失った時にこそ、神に委ねる祈りが必要なのです。何も期待せず、祈られている側もそれを知らず、みんなが集まってただ主に委ねる祈りを、私たちも熱心に献げていきたいと願います。

お祈りしましょう。